

2. 事業受託での協働チャレンジ

最初に始めたのは、週1回、気軽に誰でもお茶を飲み遊びに来られる「ほっとスペース」だった。家の中で母子だけで過ごすのではなく、ほかの人と話をして、子どもと少し距離をとることもできる時間。お互い自由な時間を持てるように、預かり保育も始めた。当初、行政担当者からは、地域課題を解決する取り組みというよりは、自分たちが楽しんで集まっている自主活動という理解をされていた。

「ほっとスペース」への反響は予想以上に大きく、利用者から「もっと開いてほしい」との声が相次いだ。すぐ週2回、3回と増やしたが、スタッフの手弁当での活動では限界がある。すると、国の補助事業(※)として市が「つどいの広場事業」(当時)を始めることを知り、市に働きかけることにした。

※地域子育て支援拠点事業のこと。乳幼児及びその保護者が相互の交流を行う場所を開設し、子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行う事業。孤立



した子育ての「しんどさ」や、仲間づくりの活動が虐待を予防することにつながると、市の担当課に利用者のアンケートや資料を持参して熱く語った。そして2005年、市が新規事業として「つどいの広場事業」を実施し、受託が決まった。日曜を除く毎日、午前10時から午後4時まで、親子がいつでも立ち寄れる「ほっとひろば」が始まった。

2年間の自主事業から市の委託事業になったことで、行政との「協働」という課題が浮上した。それにより、行政との行動様式や意思決定の手順の違いに戸惑う事となった。当初、利用者にお茶菓子を提供するか否かで、3か月議論したことがあった。アレルギー、食中毒等のリスクを想定して、提供禁止を主張する担当課に対し、「お茶の効用」と題し、親同士の仲間づくり、エンパワメントに役立つというレポートを書いた。何を実施するにもメリットとデメリットの両面がある中で、リスクを最小限にする工夫と効用を積極的に取り入れていこう、ということで決着がついた。

行政とはずいぶん議論をしたが、とりわけ記憶に残っている職員さんの言葉がある。「今必要な物がある時に、NPO組織だと、いろんなお店を見て回り、値段や使い心地を試してすぐさま判断して購入する。一方、行政は半年後にその物品が必要かどうかを判断し、その時の価値基準として最適なことを想像して、来年の買い物をする」。なるほどなあ、と納得した。どちらが正しいというわけではないが、お互いの違いを理解した上で、歩み寄りが必要なのだ。

3. それぞれの自己実現の場を

ほっとひろばを始めたころ、生まれたばかりの赤ちゃんだった子どもが今は12歳。中学の制服を見せに来てくれた子もいる。子どもの成長を身近で感じられるのは、理屈抜きに嬉しい。